

氏名	佐藤 岳晶
ヨミガナ	サトウ タケアキ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第272号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 近世邦楽言語の行方 ―西洋音楽との「萃点」における一考察

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	毛利 嘉孝
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	熊倉 純子
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	市村 作知雄
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	塚原 康子

(論文内容の要旨)

本書は、近世邦楽の特質をめぐり、西洋音楽との対照を交えた考察から、その一端を明らかとし、同時に、この二つの音楽を隔てる「差異」の類推から、音楽文化の多様性について再考することを目的とする。音楽の「多様性」の考察においては、さまざまな視点がありうるが、本書においては特に、「音楽言語」の観点から省察される。

この音楽の多様性においては、近代化、そしてグローバル化の中での、西洋音楽とその音楽言語の世界的規模でのヘゲモニーの拡大は、今日、避けて通れない検討課題の一つである。長い歴史の中で、西洋音楽とは異なる文化形態・音楽言語を育んできた世界各地の音楽文化は、西洋音楽の大きな影響力を前に、今後どのような「発展」が模索され、ひいては、人類の音楽文化のさらなる多様化へ資して行けるのであろうか。

本書では、このような問題意識から、非西洋音楽の一事例として、近世邦楽に焦点が当てられる。近世邦楽は、近代化の中、一方では西洋音楽の影響を受けつつも、他方では、今なお西洋音楽とは異質な姿が伝承され続ける、世界的にも貴重な文化遺産と言える。西洋音楽との対照を交えた本研究からは、近世邦楽言語における、西洋音楽言語との「差異」が浮き彫りにされる。筆者は、その「差異」に見出された特質こそが、音楽文化の多様性の礎であると同時に、その特質が今後どのように活かされうるかが、近世邦楽の「発展」、さらには地球規模での音楽文化への貢献の鍵になると考える。他方、そこで明らかとなる「差異としての非共約性」からは、音楽の多言語性が再確認されると共に、併せて浮上する「翻訳」の問題は、音楽を通した「自」と「他」の境界と共存について再考を促すであろう。

考察は、地歌箏曲と長唄を主な対象とする。前者においては、「双調会」の門戸を叩き、同会家元で重要無形文化財保持者の二代 米川文子師に実技指導を仰ぐ中で、同会の名取として演奏経験も重ねられた。後者においては、今藤流の今藤尚之師、ならびに今藤長龍郎師に実技指導を仰いだ。その参与観察が、本研究の基盤である。そして、そこで得られたものが、筆者の西洋音楽世界における知見と経験に対照されることで、両者の「差異」への認識は深められて行った。

近世邦楽言語の今後の「発展」の展望においては、その創造のあり方へも省察が広げられる。そこでは、社会学者の鶴見和子の「内発的発展論」を参照する。鶴見は同論において、社会・文化の地球規模での多様性への希求の下、各地域に育まれた特質を活かす「伝統の再創造」を提唱した。その一方で、博物学者の南方熊楠の「曼荼羅」の思想に触発されつつ、異質な発展を遂げる者同士の出会いと、そこでの「格闘」を経た共存への思索も深めて行った。その出会いの場が「萃点」である。そして同氏は、そこでの「格闘」に、多様性を育む「創造」の理想形を見出し、この他者への開かれを「伝統の再創造」の本義に組み込んで行くのである。

このような省察を展開する本書は、序章とそれに続く三つの章から構成される。

序章「近世邦楽と西洋音楽の『萃点』から——音楽言語の翻訳と創造」では、導入として、上記のような、全体的な問題設定の枠組み、研究目的や背景、考察対象・フィールドの概略などを述べる。

続く第1章「グローバル化世界を生きる近世邦楽——普遍／差異、音楽・言語の『抗争』<sup>ディフェラン</sup>の狭間で」では、本書の問題提起を深める。音楽文化の多様性ならびに本書が措定しようとする「音楽言語」の複数性の根拠となる「差異」と、その「非共約性」について省察する。省察においては、言語学や言語をツールとする文学の議論も参照される。その省察から、グローバル化世界の中での近世邦楽の位置・価値が再考されると同時に、そのような音楽・言語からの、多様性を抑圧する「普遍」ならびに西洋（音楽）のヘゲモニーを越えうる創造のあり方が模索される。

これに続く後半の二つの章は、近世邦楽言語の特質をめぐる具体的な事例研究となる。

第2章「松阪春栄の二面箏による音楽言語と創造——ヘテロフォニーのリズミック『錯乱』」においては、明治期の地歌箏曲家の松坂春栄の箏曲における、箏二面を用いたテクスチュアを分析する。ヘテロフォニーを原理とする多音性から、現代にも通じる複雑な響きの綾が、どのようにして生み出されたのかを考察しながら、近世邦楽が爛熟期に到達した高度な作曲技法と、その現代への継承について考える。

第3章「近世邦楽の口承性の行方——長唄三味線 今藤長龍郎師の稽古の考察から」では、今藤長龍郎師による口承を基とする稽古の参与観察から、長らく近世邦楽の伝承の根幹であり続け、その音楽言語の特質にも刻み込まれた口承性<sup>オラリティー</sup>について考える。そして、稽古法の変化に伴う口承の役割・あり方の変化を省察しつつ、今後の近世邦楽、ならびにその音楽言語の伝承の行方を展望する。

#### （総合審査結果の要旨）

本論文は、近代化とグローバル化によって西洋音楽とその音楽言語が普遍的な文化として拡大する過程において、近世邦楽がどう伝承されてきたのか、そして音楽文化全体の中でどう位置づけることができるのかを詳細なフィールドワーク／参与観察、楽曲分析、そして近代化、グローバル化をめぐる文化理論の検討を通じて明らかにしたものである。本論文の成果は以下の三点にまとめることができる。

第一に、申請者がこれまで専門的に学んできた西洋音楽の実技、作曲の知識に基づいた上で、実際に近世邦楽の地唄箏曲及び長唄の稽古を中心に参与観察を行い、その伝承の様子を詳細に記述、分析したこと。地唄箏曲については、「双調会」の門戸を叩き、米川文子師に実技指導を受け、同会の名取として演奏経験を重ね、長唄については、今藤流の今藤尚之師、及び今藤長龍郎師に実技指導を仰いだ。その成果は、第三章「近世邦楽の口承性の行方——長唄三味線 今藤長龍郎師の稽古の考察について」において、稽古の詳細な記述として描かれている。これ自体貴重な資料として評価することができる。

第二に、西洋音楽の作曲の知識を背景にしながら、明治期の地唄箏曲の作品に対する独自の分析・解釈を行ったこと。特に第二章の「松阪春栄の二面箏による音楽言語と創造——ヘテロフォニーのリズミック『錯乱』」は、松阪春栄の楽曲の現代性を『錯乱』という特徴によって分析したものであり、従来行われて来なかった松阪作品に対する本格的な分析として高く評価できる。

第三の評価すべき成果として、この論考自体が、西洋音楽と近世邦楽とをいずれの側にも還元することなく、その両者の緊張の間で書かれた一種の「翻訳」の試みであることが挙げられる。ここでいう「翻訳」とは、一つの言語から別の言語へと書き換えるだけでなく、それ自体が領域横断的な創造的な営みである。こうした創造的な翻訳作業のために、近年の社会学や文化研究における近代化理論や翻訳理論、文化人類学のフィールドワークや参与観察理論が過不足なく援用されている。

最近の文化理論と近世邦楽の具体的な分析との間には、論文の領域横断性とその野心的な試みもあり、やや論理の飛躍がある点もみられたが、これに対する疑問については論文審査会の際に十分に納得のいく回答が得られた。総じて博士号を授与するに相応しい優れた内容の論文であると評価できる。今後の実践的な活動も含めて活躍を期待したい。